

心身症及び精神疾患の児童生徒に対する ユニバーサルデザインの視点を活かした授業研究

Class study utilizing the perspective of universal design for children
with psychosomatic disease and mental disorders

石本直巳*
ISHIMOTO Naomi

長江清和**
NAGAE Kiyokazu

【キーワード】 特別支援学校（病弱） 心身症及び精神疾患 授業のユニバーサルデザイン

1. はじめに

(1) 問題

近年、特別支援学校（病弱）における心身症及び精神疾患（以下、心身症等）を抱える児童生徒が増えている。八島・栃真・植木田・滝川・西牧（2013）の調査によれば、2008年度において、全国の特別支援学校（病弱）に在籍する児童生徒のうち、心身症等の総数が6年間で約1.5倍に増加し、全国の特別支援学校（病弱）の89.0%に心身症等の児童生徒が在籍しており、その総数は1,600人であったとしている。

また、武田・武田（2017）の調査によれば、回答のあった特別支援学校（病弱）の全児童生徒数における発達障害で適応障害のある生徒数の割合は、2002年と2012年を比較して、中学部が4.5倍、高等部が12倍に増加したとしている。

さらに、発達障害を併せ有する心身症等の児童生徒の多くは、入院を必要としないレベルの病状であれば、小中学校に在籍しながら通院加療を継続している場合がその大半であると考えられる。それゆえに、発達障害を併せ有する心身症等の児童生徒への教育や支援の充実を考える上で、特別支援学校（病弱）での対応のみを考えるのではなく、小中学校等をも視野に入れた充実の方策が必要だと考えられる（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 2012）。このような現状を踏まえると、特別支援学校（病弱）において、心身症等の児童生徒に対する指導内容・方法の確立は喫緊の課題である。

しかしながら、心身症等の児童生徒を対象とした指導の実践に関する研究論文は非常に少ない現状である。森山（2018）によると、教科指導については、発達障害の認知特性に応じた環境調整や教材の工夫により、成果を上げている報告（青山, 2011）がある一方で、単に発達障害の認知特性に応じた指導・支援だけではなく、好きなキャラクターを取り入れた自作教材の活用（青

山, 2011）や、「ほめる、励ます」といった肯定的な評価を心掛ける（上乃, 2004）など、教師と児童生徒の関係づくりを丁寧に行う実践が多い。こうした研究や実践の多くは、児童生徒個々への対応や支援が基本であり、「授業」そのものをターゲットとする研究ではない。

その背景には、心身症等のある児童生徒は、同じ診断名であっても、その個々の状態像はかなり異なっており、非常に個別性が高いことが考えられる。そのため、常に教師は、ある児童生徒に適切な指導や支援であっても、別の児童生徒には有効ではない可能性があるなど、指導上の困難を抱えていると予測される。しかしながら、八島他（2013）によると、疾患に起因する精神症状や身体症状を呈する児童生徒においては個別対応を中心とした関わりが継続して求められる一方で、小集団による指導内容や指導方法の工夫など社会性を育むことを目的とした指導や支援が望まれる、としている。

加えて、特別支援学校（病弱）の児童生徒のほとんどが退院後、地元の学校へ「復学」をすることを目指すため、入院中に心身症等の児童生徒に対する効果的な指導方法や支援方法を見つけ、地元の学校に引き継いでいくことは、特別支援学校（病弱）の役割として大変重要だと考えられる。

近年、ユニバーサルデザインの視点を活かした授業研究が、小中学校の現場を中心に行われるようになってきている。日本授業ユニバーサルデザイン学会は、授業のユニバーサルデザインを「特別な支援が必要な子を含めて、通常学級の全員の子が、楽しく学び合い『わかる・できる』ことを目指す授業デザイン」と定義している。心身症等の児童生徒にとっても、授業のユニバーサルデザインを取り入れることで、「わかる」「できる」経験が増え、成功体験を積み重ねることができると考えられる。

その結果、児童生徒が今まで以上に学ぶ喜びを感じ、学習に対する意欲が高まったり、自信が持てたりする

* 埼玉県立けやき特別支援学校伊奈分校

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

と考えられる。小中学校だけではなく、特別支援学校(病弱)における授業でも、大変重要な考え方であると言える。

(2) 目的

心身症等の児童生徒が学ぶ特別支援学校(病弱)において、ユニバーサルデザインの視点を活かした授業に関する研究を行い、指導効果を検証することを目的とした。

2. 方法

(1) 期間

201X年6月から、201X年+1年1月であった。

(2) 対象者

X特別支援学校(病弱)の小学部、中学部の児童生徒に対して、授業を担当する5名の教師を対象とした。なお、研究倫理を遵守することを、校長及び対象教師に確認した上で取り組んだ。

(3) 研究計画

まず、ユニバーサルデザインの視点を活かした授業づくりを行うために、「授業のユニバーサルデザインの7原則」(長江・細渕, 2005)を位置付けた。

長江・細渕(2005)によると7原則とは、表1に示すとおりである。また、この7原則全てを満たしていることをユニバーサルデザイン授業の要件としている。

一方で、埼玉県立総合教育センターによる調査研究(2012)によると、7原則はあくまでも視点を示したものであるため、授業者がユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を設計するためには、より具体的な例示が必要であるとしている。そこで、長江・細渕(2005)の7原則をより具体化し、「授業づくりの12のポイント」として整理した。表2は、12のポイントを示したものである。表2に示した内容を参考にして、「現在、自分が授業で行っている具体的な工夫」に関して、KJ法(川喜田, 1967)を参考に、カテゴリーを見出した。まず、

表2 授業づくりの12のポイント
(埼玉県立総合教育センター, 2012)

項目		7原則の視点
1	教室整備Ⅰ「場の構造化」	③
2	教室整備Ⅱ「刺激への配慮」	①
3	ルールの確立(手順や工程)	④
4	生活の見通し	③④
5	授業の見通し	④
6	授業の組み立て	③④
7	板書の工夫	①③④
8	集中・注目のさせ方	③④
9	指示の出し方	④
10	参加の促進	②④⑤
11	個人差への配慮	②⑥⑦
12	学級モラルの形成	①

表1 授業のユニバーサルデザインの7原則(長江・細渕, 2005)

7原則	授業づくりの観点
①全ての児童が学びに参加できる授業	参加に対して制限のない、学習活動が保証されている授業のこと。学びの共同体の一員となりうる最低限の学習のレディネスを獲得している、または必要な支援の基に保証されていることで、学びの共同体としての共通課題が存在していることが必要である。
②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業	多様な興味・関心に対応でき、多様な学びのスタイルに対応できる授業のこと。一人一人の学び方が保証され、多様な学び方の重なり合いや絡み合いが、豊かな学びとして評価されるようにすることが必要である。
③視覚や触覚に訴える教材・教具や環境設定が準備されている授業	視覚や触覚による手がかりで、何を学ぶのか理解することができる、わかりやすい授業のこと。学びの興味・関心を引き出し、学び方やその目標とすることを把握するために、教材・教具の工夫や環境設定の工夫が必要である。
④欲しい情報がわかりやすく提供される授業	欲しい情報やわかりやすいメディアで必要なときに提供される授業のこと。学びの支援となる情報が、必要なときにすぐに手に入れることができるように、整理された環境づくりをすることが必要である。
⑤間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる授業	試行錯誤しながら学ぶことが認められている授業のこと。試行錯誤をするための時間と機会と環境設定が必要である。
⑥現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業	一人一人の課題を把握し、適切に設定された課題に取り組む学びができる授業のこと。正確な実態把握と適切な課題設定をすることが必要である。
⑦必要な学習活動に十分に組みこめる課題設定がなされている授業	子どもの興味・関心から生まれた活動が、十分に展開できる授業のこと。環境設定などの理由から、活動を制限して子どもの意欲をそがないように環境設定に留意することが必要である。

図1に示したように指導案の展開部分に記入された〔教師の支援〕に着目した。7原則や12のポイントと関連した工夫や支援・指導をピックアップして、それを付箋

紙に書き込んだ。その後、図2のように書き込んだ付箋紙についてカテゴリーごと関係を図解化し、図解化をもとに文章化していった。分析にあたっては、多様

時間	学習内容・活動	指導上の留意点〔教師の支援(○) 評価基準(■)〕	備考
3	1 はじめの挨拶 ◎姿勢・視線を整えて、挨拶をする。	○姿勢や視線が定まっていない時は、声かけをして整えることができるようにする。修正できた時は、称賛の声かけをする。	パソコン TV 資料箱
	2 今日の活動 ◎これから学習することや活動の流れを理解する。	○ 大型画面に流れを提示しながら 、活動内容やねらい等を説明する。 〔自立活動の視点〕*活動内容を知り、見通しをたてる。	⑦ 視覚化
20	3 知っている新幹線の路線を答えよう ◎新幹線の路線を把握できるように地図とリンクしたプリントに書き込む。	○教科書p.174②日本の高速交通網(～2015年)を見て、答えるように説明する。 ○ 教科書と同じ地図を画面にも映し 、確認できるようにする。 ○ ワークシートを配布する 。生徒の実態に応じて 3つのタイプ (あ:ヒントがなく書き込むタイプ、い:一部文字が記載されており、それをヒントに書き込むタイプ、う:選択して選んだ方にチェックするタイプ)を作成して、配布する。 〔自立活動の視点〕*自分の考えや意見を発表する。	プリント シール
	◎自分が住んでいる埼玉県から、大阪に行く場合、どんな交通手段を使うのか質問す	○ワークシートの〔どの手段を選びますか〕と〔その理由〕を3つのタイプ (あ:ヒントがなく書き込む、い:穴埋めになっている部分を書き込む、う:丸を付ける) に対して、それぞれ答えていく。 〔自立活動の視点〕自分の考えた意見を発表する。	④ 指示・説明の仕方
	予想される生徒の反応や行動(*)と教師の支援(⇒) *知っている新幹線の路線を答える。 ⇒机間巡視をしながら、「よく気付いたね」「OKだよ」と声かけをする。 *何を答えてよいかかわからず、空欄のままで動かない。 ⇒ワークシートの言葉に気づくように声かけをする。	⑨ 集団づくり	
	◎自分が住んでいる埼玉県から、大阪に行く場合、どんな交通手段を使うのか質問す	○ ワークシートの〔どの手段を選びますか〕と〔その理由〕を3つのタイプ(あ:ヒントがなく書き込む、い:穴埋めになっている部分を書き込む、う:丸を付ける) に対して、それぞれ答えていく。 〔自立活動の視点〕自分の考えた意見を発表する。	⑥ 教材 ⑩ 個に応じた支援
	予想される生徒の反応や行動(*)と教師の支援(⇒) *図や説明から自分で大阪までの交通手段を選ぶことができる。 ⇒机間巡視をしながら、「よく気付いたね」「OKだよ」と声かけをする。 *何を答えてよいかかわからず、空欄のままで動かない。 ⇒「どんな手段があるのか」を質問し、それを記入するように伝える。		
	◎自分が住んでいる埼玉県から、大阪に行く場合、どんな交通手段を使うのか質問す	○ 〔JR線(新幹線)所要時間&料金〕と〔JAL(航空機)商用時間&料金〕の表 から、早く到着すると料金がかかることが理解できるように説明する。 ■高速交通網の種類を知り、使い分けを実際に体験し、自分の生活につなげる。〔関心・意欲・態度〕〔技能〕	⑥ 教材 ⑦ 視覚化

12	<p>4 先生の解説コーナー</p> <p>◎資料（ワークシート）を見ながら、(あ)発展してきた様子 (い)地域差が生じた現状の説明を聞く。</p>	<p>○説明に注目するように姿勢と視線の声かけをする。</p> <p>○質問をして、考えて判断する機会をつくる。</p> <p>○発言内容を黒板に書き、共有できるようにする。</p> <div data-bbox="638 353 1302 560" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〔質問内容〕</p> <p>◇「1975年と2015年では、交通網にどんな変化がありますか」</p> <p>◇「新幹線や飛行機、高速道路の整備が行われていない都市はありますか」</p> </div> <p>○まとめとして、(あ)大都市から交通網が発達しているものの、まだ十分でない都市が多いことを伝える。また、(い)何も整備されていない都市があること、人口減少が進み、採算が見込めないために整備が進んでいない現状を伝える。</p> <p>〔自立活動の視点〕 *話を聞く姿勢を整える。 *質問内容を理解して、自分の考えを発表する。</p> <p>■日本の交通について、発展してきた様子を知り、一方で地域差が大きくなっていることを理解する。〔思考・判断〕</p>	
<p>まとめ 10</p>	<p>5 今日の学習の振り返り</p> <p>◎交通網は発展したが、大都市優先で地方都市は十分でないところがあること、今後はさらに交通網が整備されること（中央新幹線）の説明を聞く。</p>	<p>○パワーポイントを使い、今日学習した内容を整理して伝える。</p> <p>○質問を行い、理解ができているか確認する。</p> <p>○話を聞く姿勢に意識できるように声かけをする。</p> <p>〔自立活動の視点〕 *話を聞く姿勢を整える。</p>	
	<p>6 終わりの挨拶</p> <p>◎姿勢・視線を整えて、挨拶をする。</p>	<p>○姿勢や視線が定まっていない時は、声かけをして整えることができるようにする。修正できた時は、称賛の声かけをする。</p>	

⑦ 視覚化

④ 指示・説明の仕方

予想される生徒の反応や行動（*）と教師の支援（⇒）

- * 大都市中心に交通網が整備されていることに気づく
⇒ 「よく気付いたね」「OKだよ」と声かけをする
- * 整備されていない都市があることに気づくことができない
⇒ 何も交通がない地域に注目するように声かけして、移動手段すらない都市が存在することを伝える

図1 授業で工夫した指導や支援のポイントの具体例

な解釈を十分に検討し、恣意的な解釈を防ぐため、A 大学教授を加えて計6名で行った。

なお、研究については、下記の手順で行った。当初

の計画と異なる部分もあるが、実践的な研究であり、教師間の気づきや意見集約をもとに進めていったため、その都度、修正や変更をしながら進めていった。

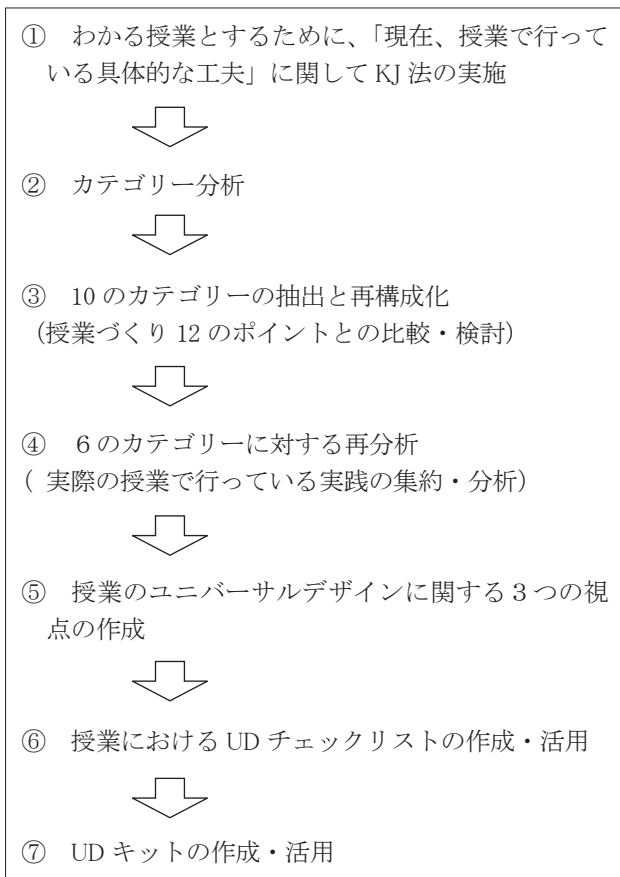


表 3 KJ法で見出したカテゴリーと 12 のポイント

	KJ 法でのカテゴリー	授業づくり 12 のポイント
①	授業の流れの明確化	1・5
②	授業づくり	12・12
③	授業展開の工夫	1・5・6
④	指示・説明の仕方	3・8・9
⑤	板書	7
⑥	教材	5・10・11
⑦	視覚化	1・3・5
⑧	学習環境を整える	2
⑨	集団づくり	10・11・12
⑩	個に応じた支援	4・11

そこで、10 のカテゴリーについて、さらに関係性を整理する中で、6 のカテゴリーに絞り込むことができた。

絞り込む過程においては、①授業の流れの明確化、②授業づくり、③授業展開の工夫、⑧学習環境を整えることは、「授業に関する内容」として、1 つに集約することとした。また、⑨集団づくりについては、「すべての児童生徒が安心して授業に参加できる雰囲気を作ることが特別支援学校（病弱）には必要」という観点から、どの授業にも共通した基本となる視点であることから、すべての項目に関連させていくこととした。

この結果、導き出された 6 つのカテゴリーとは、①授業の流れの明確化・展開の工夫、②指示・説明の仕方、③視覚化、④板書、⑤教材の工夫、⑥集団における「個に応じた支援の工夫」であった。

なお、カテゴリーを絞り込む際には、病院内にあり、治療と教育を並行的に行う特別支援学校（病弱）の持

3. 結果

KJ法にて見出されたカテゴリーは 10 であり、表 3 に示すとおりだった。

また、KJ法にて見出されたカテゴリーと先に示した「授業づくりの 12 のポイント」との関係性を表 3 に示した。10 の項目にすべてが関連しており、見出されたカテゴリーに対する妥当性が得られた。

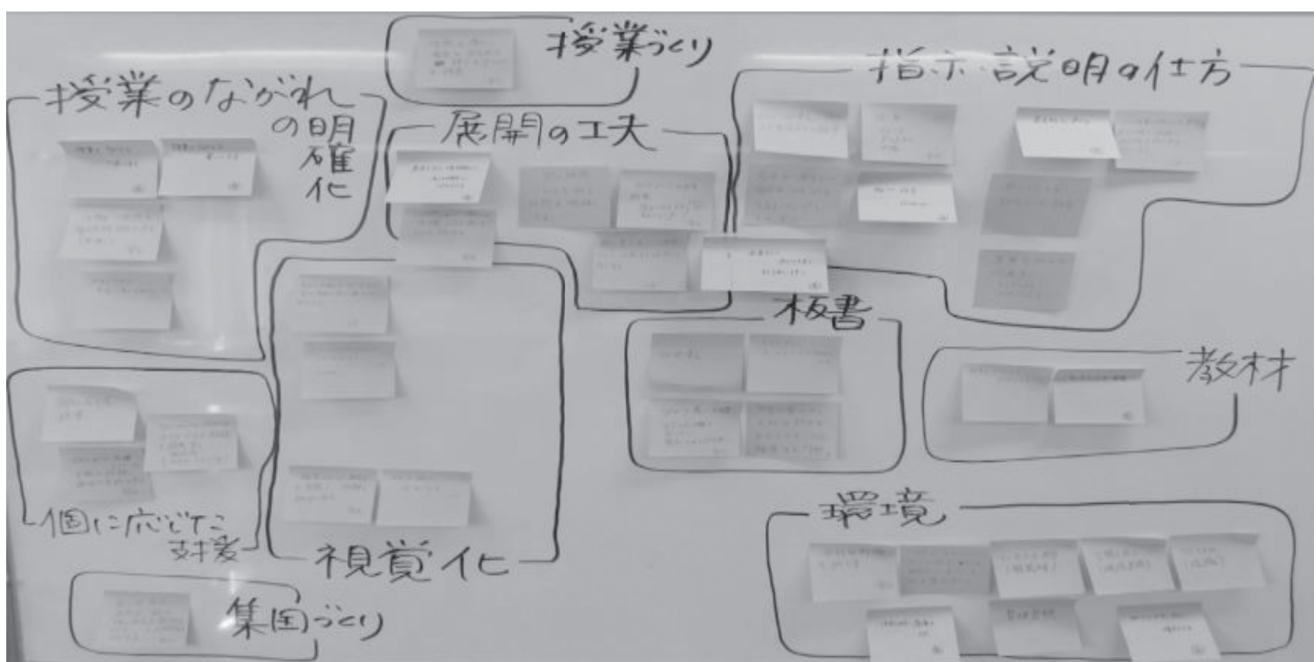


図 2 KJ法によるカテゴリー関係図

つ独自性や、日々変化する児童生徒の状態や抱える課題の多様性を十分考慮しながら行った。

授業改善のためのポイントとして、意識しやすくするように、さらにポイントを絞っていった。そこでまず、6つのカテゴリに対して、教師間で再度、日々の授業を振り返り、「実際の授業でどんな実践を行っているか」をアンケート形式で集約した。自分が行う実際の授業の中で行っている具体的な指導・支援の内容について、6つのカテゴリにそって具体的に挙げていった。また、特別支援学校（病弱）の授業を意識し、児童生徒の様子を思い浮かべながら、わかりやすい授業につながる視点を絞り込んでいった。

その結果、表4に示す「3つのカテゴリ」を抽出することができた。それは、①学習内容の明確化、②指示・説明の工夫、③個々の実態に応じた支援の工夫、であった。話し合いを通じて、各カテゴリのベースには、構造化や視覚化の考え方があることや、個々の児童生徒の状況や課題を理解した上で指導や支援が重要であることも確認することができた。

表4 授業のユニバーサルデザインの視点

①	学習内容の明確化
②	指示・説明の工夫
③	個々の実態に応じた支援の工夫

さらに①～③の具体的な項目として、以下がそれぞれ挙げられた。

① 学習内容の明確化

- ・学習内容の提示や視覚化する
- ・導入の工夫（スタートを同じ活動にする）をする
- ・授業の流れを一定にする
- ・活動の「終わり」の明確化（タイマーの活用）する
- ・「学習のめあて」「まとめ」などポイントを明確化する

② 指示・説明の工夫

- ・説明や指示はシンプルで、端的な内容にする
- ・ICT等、視覚的な補助手段を活用する
- ・モデルや実物を示しながら説明する
- ・ICTを活用した表出の活用（タブレット等）
- ・「何をすればいいのか」がわかるプリントを活用する

③ 個々の実態に応じた支援の工夫

- ・理解の段階に応じた教材の工夫
- ・一人ひとりにスポットが当たる場を作る
- ・意見を言いやすい工夫（事前に考える時間を設定する、ホワイトボードの活用をする、否定的でない雰囲気づくり）をする

①から③について、特別支援学校（病弱）における授業のユニバーサルデザインの視点として、チェックポイントとして表5のようにまとめた。各項目に対して、毎時間授業前にチェックをして、さらに授業後、振り返ることができるように、チェック表を活用した。

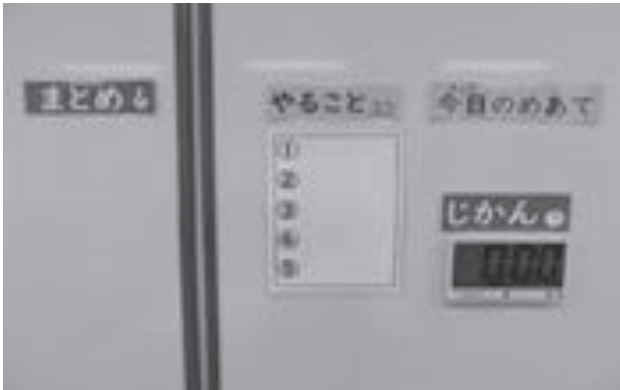
また、教師間の話し合いを重ね、それぞれの項目について、「当たり前実践している」や「普段から特に意

表5 授業のユニバーサルデザインに関するチェックリスト

	授業UDの視点	授業UDにおけるチェックポイント	チェック
1	今日の学習の明確化	[必] 授業の流れを提示する（黒板に示す）	
		[こだわり] 導入（スタート）の工夫（一定にする・復習から）	
		流れを一定にする	
		[必] 個人のやることや目標を明確にする	
		[必] 終わりを明確にする（タイマーの活用）	
2	指示・説明の工夫	[必] 視覚（TV・PC・写真・絵・図）の併用	
		[必] 言葉（説明）は端的に・要点を絞る	
		実物を提示する・モデルを示す	
		「何をすればいいのか」がわかるプリントの活用	
		[こだわり] 興味の引く「仕掛け」がある	
3	個に応じた支援の工夫	一人一人にスポットの与える場を作る（役割・発表）	
		[必] 理解の段階に応じた教材（プリント）の工夫（なぞり・一文字のみ書き込む・難易度・量の増減）	
		[こだわり] 意見を言いやすい工夫（考える時間の設定・ホワイトボード活用・言いやすい雰囲気作り）	

識している」内容については、必ず実施する内容として、項目の前に〔必〕として、意識化を図った。加えて、普段の授業の中であまり実践していない内容に対しては、「実践は少ないものの、授業のユニバーサルデザイン化において重要な視点であり、あったらいい支援」であるとして、項目の前に〔こだわり〕と示すこととした。

さらに、「①今日の学習の明確化」に関する項目について、スタンダード化を目指し、「UDキット」としてすべての教室に統一したカードを作成した。具体的には、授業に関する流れを示す「今日のスケジュール」や、



学習のねらいを明確化し、焦点化しやすいうように「学習のねらい」や「学習のまとめ」であった。また、スクールタイマーやタイムタイマーもすべての教室に設置したことで、「いつまでやるのか」や「終わり」を児童生徒に明確に伝えることができるようになった。

4. 考察

本研究では、X特別支援学校における心身症等の児童生徒に対する効果的な授業づくりの視点を明らかにすることを目的として、KJ法に基づき、授業のユニバーサルデザインの視点を整理することができた。さらに、整理した視点を授業前に確認する「UDチェックシート」にしたり、学習の流れを示すスケジュール表や、「学習のポイント」や「まとめ」などを示したりする「UDキット」を作成し、表示の統一をすることで、構造化や視覚化を行うことができた。

その結果、ユニバーサルデザインの視点に対する教師の意識が変化し、どの授業でもユニバーサルデザインの視点を活かした授業づくりが意識され、当たり前のように行われるようになった。さらに、年次研修の学習指導案の展開にも「UDの視点」が入り、この活動で重点化しているUDの視点を明確にするようになったことも大きな成果であった。こうした取り組みを通して、心身症等の児童生徒における授業での指導効果が一層高まったと考えられる。そして、こうした取り組みは、特別支援学校（病弱）における授業づくりにおいて、「構造化」の有効性を再意識することになったと考えられる。

(1) 構造化について

小貫（2016）は、授業UD達成のための授業階層に基

づく視点モデルの中で紹介している。階層モデルの第一段階である授業の外枠を整備する中に、「場の構造化」と「時間の構造化」があるとしている。「場の構造化」は、教室空間に一定の規則性を持ち込んで、使いやすくする工夫だとしている。机の位置がわかるように床に印をつけることがその一つだと考えられる。印があることで机が整いやすいだけではなく、教師からの声かけも減ると考えられる。「時間の構造化」は、学習活動において、「迷子」を作らずに済むことであり、今、何をしているのかがわかるように学習の流れを視覚的に示すことである。主体的・協同的な学習の場において、オンタイムで授業に乗せる必要があり、そのために重要な視点だと考えられる。

また、階層モデルの第二段階である授業理解を進めるための視点として、「展開の構造化」がある。これは、授業のねらいと活動が明確になった授業展開の工夫だと考えられる。「何をするのか」「どうやってするのか」がわかりやすい展開こそ、多くの児童生徒が授業に乗れて、活躍しやすくなると考えられる。その他にも、手順ややり方を明確にすること、「いつまで行うのか」など、終わりのための基準（回数や時間）を提示することも構造化の視点の中に含まれる。

発達障害の特性から、特別支援教育において、構造化の視点はとても重要視されてきている。特別支援学校（病弱）においても年々、発達障害を併せ有する心身症等の児童生徒の割合も増加していることから、構造化の視点が授業づくりの上で非常に重要であることは明確だと言える。

今回、抽出された（1）学習内容の明確化の中には、「場の構造化」や「時間の構造化」、「展開の構造化」の要素が多く含まれていた。この結果を踏まえると今後、心身症等の児童生徒が参加する授業において、どんな視点が有効なのか、構造化に焦点を絞った検証も必要だと考えられる。

(2) 視覚化について

小貫（2016）は、情報を「見える」ようにして情報伝達をスムーズにする工夫であるとしている。授業UD達成のための授業階層に基づく視点モデルの中で視覚化は、「理解」の階層にある。授業は、多くの場合に聴覚情報と視覚情報の提示によって成立している。この二つの情報の間にある違いは、「消えていく」か「残る」であり、視覚情報の「残る」性質を大いに利用することが大切である。加えて、見てわかることは、「今、何をするのか」を理解しやすくなるだけではなく、手順や工程をスムーズに理解する際にも役に立つと考えられる。特別支援学校（病弱）の児童生徒にとって、何をすることがわかることは、「自分で課題を終了することができた」、「何をすることがわかって、正確に行うことができた」と達成感や満足感が得やすくなり、必要不可欠な支援だと考えられる。

(3) 今後の課題

後の教師同士の振り返りでは、①活動への参加率が上がった、②逸脱行動が減った、③入院等でメンバーが変わっても授業がスムーズに流れるようになった、などの児童生徒及び、授業の変容に関する肯定的な意見が数多く出された。今回のように、授業において「どんな支援が有効なのか」を検証することは、児童生徒の自己理解にもつながり、より積極的な支援につながると考えられる。児童生徒と「わかりやすい授業」について確認する上で、授業におけるポイントを示すことは有効だったと考えられる。視覚化されたポイントを見ながら、児童生徒の実体験や実感した内容について、話し合いを重ねることで、より自己理解が深まり、自分自身に有効な支援について知る機会となると考えられる。

今後は、こうした意見に対する更なる検証を行い、効果的な授業づくりのポイントを明らかにしていきたいと考える。ほとんどの児童生徒が退院後、前籍の小中学校へ戻ることを想定し、入院中、特別支援学校（病弱）の中で、「授業でつきたい力」や「次の学校へつながらる指導や支援」については、教師が敏感になり、内容を把握していく必要があると考える。そのためには、自らの授業に対するユニバーサルデザイン化を進めるだけでなく、児童生徒個々の状況に応じた復学への「学びの橋渡し」が大切である。そのために退院し、復学した児童生徒に関する小中学校への情報収集を積極的に行い、学習面における復学後に必要な事項を整理していくことも重要である。そして、日々の授業へ、こうした視点を活かしていくこと重要だと考える。児童生徒は、入院中の学びを「最後のチャンス」や「やり直しの機会」と捉えている。児童生徒は過去に、学校でどんなに辛い経験をして、授業の中で「わかった」「できた」瞬間は、達成感や充実感に満ちた表情を見せてくれる。こうした「瞬間」や児童生徒の「思い」に応えることができるように、今後も実践研究を重ね、授業力の向上を図っていきたい。そして、一人でも多くの心身症等の児童生徒が「楽しい」「もっとやってみよう」と感じる魅力的な授業を実践していきたいと考える。

【引用・参考文献】

- 青山由紀 (2011) 児童のもつマイナスイメージや抵抗感を減らし、活動への参加を促すための支援—発達障がいと併せもつ小学部児童の指導事例—。病弱虚弱教育, 51, 25-25.
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2012) 専門研究B「特別支援学校（病弱）のセンター的機能を活用した病気の子ども支援ネットワークの形成と情報の共有化に関する研究」研究成果報告書。
- 川喜田二郎 (1967) 発想法。中央新書。
- 森山貴史 (2018) 病弱教育における発達障害を併せ有する心身症等の児童生徒を対象とした実践研究の動

向—特別支援学校（病弱）の実践資料の検討から—。LD研究, 27(4), 521-531.

森山貴史 (2016) 精神疾患や心身症のある児童生徒の教育的ニーズに関する一考察—A 特別支援学校（病弱）教員対象の調査を踏まえて—。国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 第43巻, 45-57.

長江清和・細渕富夫 (2005) 小学校における授業のユニバーサルデザインの構想—知的障害児の発達を促すインクルーシブ教育の実現に向けて—。埼玉大学紀要教育学部（教育科学）, 第54巻(1), 155-165.

小貫悟 (2016) アクティブ・ラーニングと授業のユニバーサルデザイン—アクティブ・ラーニング自体をUD化するための〈視点モデル〉と〈授業設計基本フレーム〉の提案—。LD研究, 25(4), 423-430.

武田鉄郎・武田陽子 (2017) 特別支援学校（病弱）に在籍している発達障害のある児童生徒の現状。育療, 60, 6-9.

上乃久代 (2004) 個々の子どもの生きる力をはぐくむ教育活動や支援のあり方を求めて—「生きる力」をはぐくむ教科指導のあり方を探る取り組みを通して、A児の実践から—。病弱虚弱教育, 44, 36-38.

八島猛・柄真賀透・植木田潤・滝川国芳・西牧謙吾 (2013) 病弱・身体虚弱教育における精神疾患等の児童生徒の現状と教育的課題—全国の特別支援学校（病弱）を対象とした調査に基づく検討—。小児保健研究, 72, 514-524.